

## 喘息病態モルモットの気管におけるバニロイド受容体について

渡邊直人<sup>1)2)</sup>、堀江俊治<sup>2)</sup>、Domenico Spina<sup>3)</sup>、John V. Priestley<sup>4)</sup>、  
Clive P. Page<sup>3)</sup>、宮澤輝臣<sup>1)</sup>  
(聖マリアンナ医科大学呼吸器・感染症内科<sup>1)</sup>、城西国際大学薬理学講座<sup>2)</sup>、  
King's College London<sup>3)</sup>、Queen Mary University of London<sup>4)</sup>)

**【目的】**我々は、すでにモルモット気道(気管、気管支、肺)におけるバニロイド受容体(TRPV1)染色に成功し、その分布状況を報告した。今回は喘息病態におけるTRPV1の変化と分布状況を確認し、その役割を検討する目的で、Ovalbumin(OVA)感作により喘息モルモットモデルを作製し、その気管におけるTRPV1染色を試みた。

**【方法】**OVA感作とSham(Alum)のモルモットを二重盲検法により5匹ずつ作製した。各々より気管を摘出し凍結切片を作製し、一次抗体としてウサギ血清抗TRPV1抗体を40時間以上、二次抗体としてビオチン結合抗ウサギ抗体を用い90分間インキュベートさせ、ABC法とFITC-tyramideにて蛍光染色し、共焦点レーザー顕微鏡を用いて観察し比較検討した。

**【結果】**平滑筋および上皮細胞下にTRPV1神経線維が多く分布していたが、OVA感作群はSham群よりTRPV1神経線維が強調され、その数も増加していた。

**【考察】**気管のTRPV1はアレルギー性炎症により増加することが示唆された。